

# いのちと地域を守る

## 宮城県内の主な防災震災学習施設

※開館日時等は各施設にお問い合わせ

施設名	所在地	電話番号	内容
唐桑半島ビジターセンター・津波体験館	気仙沼市	0226-32-3029	映像や音響、振動などを通じ津波を疑似体験できる
女川町まちなか交流館	女川町	0225-24-6677	宅地造成など震災後の新しい町の姿を模型で展示
南浜つなぐ館	石巻市	0225-98-3691	震災前の街を模型で再現。シアターホールで被災地の変遷を放映
東松島市震災復興伝承館	東松島市	0225-86-2985	震災遺構の旧野蒜駅プラットフォーム、慰霊碑を併設
仙台市荒浜小	仙台市若林区	022-355-8517	津波の爪痕が残る教室や廊下を公開。地区の歴史や文化も紹介
岩沼市千年希望の丘交流センター	岩沼市	0223-23-8577	震災の記録・記憶の伝承と地域の復興活動の拠点施設



被災地の状況を伝えるパネル。旧野蒜小の津波遺構も展示されている

東松島市のJR仙石線旧野蒜駅に整備された市震災復興伝承館は、周辺の被災状況や復興の歩みをパネルや映像で伝える。屋外には震災遺構として保存されたプラットフォームがあり、曲がった線路が津波の衝撃を伝える。

同市では1109人が犠牲になり、市域の約36%が浸水した。伝承館は2階建てで、3・77の高さに津波到達を示すラインが引かれている。約160枚の写真、旧野蒜小体育館の時計、壊れた券売機などを展示。津波の記録映像を大型スクリーンで放映する。



被災地の状況を伝えるパネル。旧野蒜小の津波遺構も展示されている

岩沼市沿岸部で造成中の「千年希望の丘」にある交流センターは防災教育と植樹活動の拠点施設だ。内陸に集団移転した6地区の被災や復興過程を紹介する。

鉄骨平屋で2016年に市が開館。パネルは約80枚、映像は5カ国語に対応する。同市下野で発見された今回の震災と、貞観地震(869年)の津波堆積物がある砂層も展示している。

岩沼市沿岸部で造成中の「千年希望の丘」にある交流センターは防災教育と植樹活動の拠点施設だ。内陸に集団移転した6地区の被災や復興過程を紹介する。

鉄骨平屋で2016年に市が開館。パネルは約80枚、映像は5カ国語に対応する。同市下野で発見された今回の震災と、貞観地震(869年)の津波堆積物がある砂層も展示している。

## 東松島市震災復興伝承館 威力物語るレール

東松島市のJR仙石線旧野蒜駅に整備された市震災復興伝承館は、周辺の被災状況や復興の歩みをパネルや映像で伝える。屋外には震災遺構として保存されたプラットフォームがあり、曲がった線路が津波の衝撃を伝える。

同市では1109人が犠牲になり、市域の約36%が浸水した。伝承館は2階建てで、3・77の高さに津波到達を示すラインが引かれている。約160枚の写真、旧野蒜小体育館の時計、壊れた券売機などを展示。津波の記録映像を大型スクリーンで放映する。

同市では1109人が犠牲になり、市域の約36%が浸水した。伝承館は2階建てで、3・77の高さに津波到達を示すラインが引かれている。約160枚の写真、旧野蒜小体育館の時計、壊れた券売機などを展示。津波の記録映像を大型スクリーンで放映する。

## 復興を学ぶ夏休み

東日本大震災から7年5カ月が経過した。風化を防ぐと、津波被害のすさまじさを教訓を伝える遺構や学習施設が宮城県の沿岸部にある。当時の記憶がほとんどない子どもたちもいるだろう。夏休みを活用し、家族と一緒に被災地で復興の様子を学んでみよう。

宮城・沿岸部の遺構や施設

東日本大震災から7年5カ月が経過した。風化を防ぐと、津波被害のすさまじさを教訓を伝える遺構や学習施設が宮城県の沿岸部にある。当時の記憶がほとんどない子どもたちもいるだろう。夏休みを活用し、家族と一緒に被災地で復興の様子を学んでみよう。

## 石巻・南浜つなぐ館 災後の状況VRで

2020年度の完成に向け「石巻」の看板も移設された。整備が進む石巻市南浜地区の復興記念公園。盛り土された一角に、公益社団法人みらいサポート石巻が運営する震災伝承施設「南浜つなぐ館」がある。屋外には「がんばろう」の看板も設置されている。

2020年度の完成に向け「石巻」の看板も移設された。整備が進む石巻市南浜地区の復興記念公園。盛り土された一角に、公益社団法人みらいサポート石巻が運営する震災伝承施設「南浜つなぐ館」がある。屋外には「がんばろう」の看板も設置されている。

## 津波示す地層展示

岩沼市沿岸部で造成中の「千年希望の丘」にある交流センターは防災教育と植樹活動の拠点施設だ。内陸に集団移転した6地区の被災や復興過程を紹介する。

岩沼市沿岸部で造成中の「千年希望の丘」にある交流センターは防災教育と植樹活動の拠点施設だ。内陸に集団移転した6地区の被災や復興過程を紹介する。

## 伝える

宮城県七ヶ浜町の町女性消防団班長相沢まり子さん(66)は、津波発生時、消防団のポンプ車で避難を呼び掛けた。高台に移動した直後、津波に流されたが、民家の門柱に引っかかり、一命を取り留めた。その際、右膝の骨を折る大けがをした。

2011.3.11

## 探る

東日本大震災の経験を教訓に、被災地の大学として何をすべきか、多くの課題が見えた。その一つが地域や職場で災害への備えを担う防災知識を身に付けた人材の育成だった。

東北福祉大は2013年、防災士の養成研修講座を始めた。防災士はNPO法人日本防災士機構(東)が認定する資格。現在まで毎年10回以上、独自カリキュラムによる講座を開催し、学生をはじめ住民や自治体、

## 大学の防災士養成 地域のリーダー役に

東北福祉大教授 船渡 忠男さん

企業、福祉施設の担当者らを対象に、延べ5000人以上を養成した。防災士になるには、座学と演習の講座に加え、救急救命講習を受け、日本防災士機構の試験に合格する必要がある。講座は、防災士教本に示す31講目から12講目以上を履修する。

13年、資格を取得した学生や教職員が中心となり、東北福祉大が防災士協議会を設立。14年にボランティアとして活動する学生に当たる。事前決めておかなければ、活動が困難だ。平時の各活動で問題点や改善点を振り返り、学生同士で課題を情報交換し、問題の解決を図っていくことが大切だと考える。日頃から地域の方々と交流を深め、継続的な連携を促進していくことが大事になる。

## 津波にのまれ右膝大けが (宮城県七ヶ浜町)

震災時は宮浦田浜にあった七ヶ浜土地改良区の事務所まで歩いていました。津波警報が出たので、約10分離れた花刈浜長須賀にあつた自宅に戻り、消防団の作業服に着替え、詰め所に向かいました。消防団員4人とポンプ車で宮浦田浜を巡回しました。渦巻く潮が見え、津波が迫ってきたのが分かりました。急いで「招又」という高さ約10メートルの高台に移動しました。16



津波で、帯が浸水した宮城県七ヶ浜町宮浦田浜。2011年3月11日午後4時ごろ(七ヶ浜町提供)

## 漂着物で応急手当

11年の震災三陸地震の時、人々が手招きして津波避難を促した言い伝えがある場所です。辺りに白い土煙が上がり、最初はぼやかと思いましたが、バリバリと響き渡るような音が、目の前に茶色の大きな水の壁が現れた瞬間は、何なのか全く分かりませんでした。右膝をぶつけて、骨折してしまいました。その時、痛みで気が付きました。必死に地面を這って空気に着きました。偶然、板の束とマフラーが流れ着き、それらを添え木代わりに右足を固定しました。消防団の講習で学んだ応急手当が役に立ちました。近くの民家で一晩過ごし、電気が走るような痛みやぬれた服の冷たさ、製油所の爆発音、余震の恐怖は今も忘れられません。翌日、塩釜市の病院に搬送されましたが、手術は受けられませんでした。家族と再会したのは5日後。宮浦田浜が壊滅し、自宅が流されたこと、友人がなくなっていることを知らされ、涙が止まりませんでした。

## 自主組織 必要性説きたい

老人会や親子向けに防災に関する研修会を月1回程度開いています。消火器や自動体外式除細動器(AED)の使い方を教えたり、特殊な装置を使った火災時の煙体験などを行っています。危険が迫ったときに経験がないと適切に動くことができません。

NPO法人青森県防災士会会長 小山内敬子さん(65)

災害時に大切なのは「自分たちの地域は自分たちで守る」という考えです。そのために地域ごとに防災組織をつくることです。青森県の自主防災組織率は48.7%(2018年現在)で全国で下から2番目。町内会などを対象に自主防災組織の必要性を説いていきたいです。

## 豪雨災害に備え合同訓練

地区で自主防災組織をつくろうと決めたのが、東日本大震災の1週間前でした。3.11での炊き出しが事実上のスタートで、4月に正式に発足しました。野田は阿武隈川と小田川の合流地点で、西日本豪雨など豪雨災害が増える中、水害対策が最重要です。昨年、排水ポン

角田市野田区自主防災会会長 仙石直人さん(62)

現場から

## 現場から

排水ポンプが完成しましたが、「ポンプがあるから大丈夫」という油断が禁物。小田川沿いの4行政区合同の防災訓練を行い、備えを確認しました。日頃から地域のつながりを深めるため、自主防災会で敬老会を行っています。万一のときに安心してほしいです。

## 自主組織 必要性説きたい

老人会や親子向けに防災に関する研修会を月1回程度開いています。消火器や自動体外式除細動器(AED)の使い方を教えたり、特殊な装置を使った火災時の煙体験などを行っています。危険が迫ったときに経験がないと適切に動くことができません。

NPO法人青森県防災士会会長 小山内敬子さん(65)

災害時に大切なのは「自分たちの地域は自分たちで守る」という考えです。そのために地域ごとに防災組織をつくることです。青森県の自主防災組織率は48.7%(2018年現在)で全国で下から2番目。町内会などを対象に自主防災組織の必要性を説いていきたいです。